

「日韓学生フォーラム」体験記 — 筑豊・水俣

反骨のジャーナリストの足跡をたどる旅

2017年秋の初開催以来、5回目を迎えたジャーナリストを目指す日韓学生フォーラム。参加学生らが感想を綴った。



経済発展を優先する国と企業の不作為 朝鮮人が強制労働に従事した 負の歴史

ジャーナリストを目指す日本と韓国の大学生が交流を通じて互いの国を知る「日韓学生フォーラム」 in九州が1月29日〜2月2日に開かれ、日韓の学生と実行委員ら約30人が福岡と熊本を訪れた。

新聞記者とOB有志が新聞労連や日本ジャーナリスト会議（JCJ）と共催する企画は、毎年日本と韓国を相互訪問。日本では20

18年8月の広島、昨年2月の沖縄に続いて3回目の開催となった。今回は「反骨のジャーナリストの足跡をたどる旅」と題し、国内最大の産炭地として日本の近代化を支えた福岡・筑豊と、四大公害病の一つ「水俣病」で有名な熊本・水俣をバスで巡った。

石炭産業の繁栄の影には、麻生太郎副総理財務相につながる財閥

写真上／麻生吉隈炭鉱の共同墓地があったとされる公園(猪股修平撮影以外の写真撮影／河合遼)。中／熊本県荒尾市の三池炭鉱万田坑は明治日本の産業革命遺産の一つ。下／水俣湾。廃水が流れ込み魚介類が汚染された。

福岡県飯塚市にある広大な麻生家の邸宅の門。



による搾取や、多くの朝鮮人が炭鉱労働者として強制労働に従事した負の歴史が隠されている。有機水銀中毒で多くの人々の命と健康を脅かした公害の背景には、経済発展を優先する国と企業の不作為が浮かび上がる。

炭鉱労働の実態を取材した上野

英信（1923～87年）や林えいだい（1933～2017年）、水俣病の語り部だった石牟礼道子（1927～2018年）ら、反権力の立場で被害者に寄り添った記録者の視点にも触れた。取材行為を理由に記者が逮捕された「西山事件」の当事者で、北九州市在

住の元毎日新聞記者西山太吉さん（88歳）は、記者としての気概を熱く語ってくれた。今回も、毎日新聞、共同通信、NHK、中国新聞、千葉日報などで4月から記者として働く学生7人が記事を執筆した。また韓国の参加者を代表して記事を寄せた

権大鉦（韓国カトリック大学校）は、帰国後に徴兵のため、約2年の軍隊生活に入った。深夜まで酒を酌み交わして親交を深めた日本人学生にとって、今も南北分断が続く朝鮮半島の現実を直視する機会にもなったはずだ。

新崎盛吾・元新聞労連委員長

西山太吉氏講演 「権力が何を隠すか意識し続けよ」

ゆ つくりと、だがしつかりとした足取りで伝説の記者は

現れた。元毎日新聞記者の西山太吉さん。初めてその名前を知ったのは高校生の時だ。現代社会の教科書には「機密漏洩事件」として「西山事件」が紹介されていた。その当事者を目の前にして、思わ

ずメモを取る手が震えた。

「民主主義の太前提にある情報公開が、日本は先進国の中で最も遅れている」。自らの逮捕容疑となった沖縄返還を巡る日米間の密約を例に、西山さんは冒頭から核心を突いた。

政治部記者だった西山さんは1971年、密かに入手した極秘電信文を基に、米軍用地の原状回復費用を日本が肩代わりする密約の存在などをスクープした。ところが、電信文をリークしたとして外務省の女性事務官が逮捕され、起訴状に西山さんとの男女関係が記されていたことから、世間の関心は密約問題から男女間のスキャンダルに誘導された。その後、西山さんは執行猶予付きの有罪判決が確定。事件は、山崎豊子氏の小説『運命の人』のモデルとなり、テ

レビドラマも放映された。

2000年に密約の存在を裏付ける米公文書が明らかにになり、06年には元外務省アメリカ局長の吉野文六氏が密約を認めたが、最高裁は14年に文書の開示を認めない判決を出した。

「佐藤栄作内閣が自らの業績のために密約を結び、日本の国家体制や安全保障の形が変わってしまった」と西山さん。イラク戦争の時にも、英米が自国の責任を明らかにする一方で、日本は「外交上の機密」を理由に非公開に徹したと指摘。「日本は戦後の対米関係の中で、きわめて精巧なごまかしの技術を作り出した」と批判した。さらに、メディアについても「政府の情報統制に支配されている。社会で果たしている役割は決して高くない」と分析。近著『記者と

国家』（岩波書店、19年）でも、特定秘密保護法の制定で情報公開の困難が増したとして「日本のメディアが壁を突き破る能力を持ち合わせているかと言えば、はなはだ疑問だ」と指摘している。

では、事実を覆う壁が厚くなつた日本で記者はどうすればよいのか。講演後の懇親会で西山さんに尋ねてみた。「権力が何を隠すかを自分自身で意識し続け、分析する努力を怠らないことだ」。講演の時とは異なる穏やかな声で論じられた。

ここでふと気になった。不名誉な判決でペンを折ることになり、記者人生に悔いはないのだろうか。率直にぶつけてみると「やり残したことはない。特ダネは取れるだけ取った。密約報道は氷山の一角だよ」。伝説の記者は淡々と言い放つてビールをあおった。



「やり残したことはない」と笑いながら語った西山太吉さん（中央）。（撮影／猪股修平）

筑豊 曾祖父が働いていた炭鉱の街

福岡県飯塚市内をバスで走るのと、JR飯塚駅近くにある小高い三角形の山が見えてくる。木々に覆われた普通の山に見えるが、実は炭鉱から出た石炭以外の石や岩を積み上げてできた「ボタ山」だ。標高は約140メートル。その形から地元では「筑豊富士」とも呼ばれている。

私の曾祖父は、「住友忠隈炭鉱」で石炭の品質管理の仕事をしてきた。フォーラムに参加したのは、曾祖父が働いていた炭鉱の歴史を知りたいと考えたからだ。住友忠隈炭鉱は1894年に住友財閥に買収されるまで、麻生太郎財務相

バスを降りて坂道を上ると、一見どこにでもある墓地の風景が広がっていた。雑然と並ぶ墓石の脇を進むと、ひと抱えぐらいの苔むした石を囲むように、朝鮮半島の統一旗がいくつも並べられた広場に出た。福岡県添田町の「日向墓地」。戦前の日本の富国強兵を支えた名もなき朝鮮人労働者たちが眠る場所だ。

筑前と豊前から名付けられた「筑豊」は、福岡県中部の田川、飯塚、直方の3市が中心の地域で、明治時代から石炭産業で栄えた。筑豊

の曾祖父に当たる麻生太吉が保有していた。麻生家は炭鉱開発で大きく成長し、飯塚市内には今も大きな邸宅が存在感を示している。

筑豊の炭鉱産業は明治時代から日本の近代化に大きく貢献し、日本一の石炭産出量を誇っていた。最盛期だった1950年代には265の炭鉱があり、全国の石炭の約3割を産出していたという。その後は60年代にエネルギーが石油に転換する中で次々と閉山し、76年にはすべてが操業を停止した。

福岡県桂川町で、住宅街の中にある公園を訪れた。映像作家の西嶋真司（62歳）さんによると、麻

最大の三井田川鉱業所の跡地に建つ「田川市石炭・歴史博物館」には、落盤事故などの危険と隣り合わせだった当時の過酷な労働の記録画が展示されている。自身も炭鉱労働者として働き、墨画や水彩画と短い文章で当時の様子を記録した山本作兵衛の作品群は、2011年に世界記憶遺産に登録された。労働者の中には、植民地だった朝鮮半島から働き口を求めてやってきた人々がいた。実態は分かっているが、強制的に連れてこられた人も多かった。朝鮮人は落盤

生家が開発した「麻生吉隈炭鉱」の共同墓地があった場所だという。周囲には、墓地だった歴史をうかがわせる慰霊碑などは残っていない。

筑豊を拠点に、負の歴史を追い続けた記録作家の林えいだいさんは、近くにあった朝鮮人寮の賄い婦から聞いた話として、炭鉱事故などで亡くなった身寄りや引き取り手のない多くの朝鮮人が埋葬されたことを紹介している。

飯塚市に住む70代の大叔母も、炭鉱があつたころに多くの朝鮮人が暮らしていたことは知っていた。炭鉱の実情や朝鮮人が働いていた歴史は、しっかり記録しておかなければ消されてしまうかもしれない。

統一旗が並ぶ 朝鮮人労働者の眠る場所

の危険が高い採掘など、日本人よりも危険な作業に従事し、番号が縫い付けられた服を着せられ、地域で逃げられないよう監視する態勢もつくられていたという。

彼らは炭鉱に向かう道を、朝鮮半島の代表的な民謡にちなんで「アリラン峠」と呼んだ。今回の案内役だった西嶋真司さんが制作したドキュメンタリー映画『抗い記録作家 林えいだい』の中で、林さんは「筑豊には地図にないアリラン峠が28か所あつた」と証言する。西嶋さんは、かつて朝鮮人



筑豊富士とも呼ばれる「住友忠隈炭鉱」のボタ山。

い。春から記者として働く私は、埋もれた歴史を掘り起こして記録することの意義を胸に刻んだ。

河合遼・早稲田大学大学院



朝鮮からつれてこられた労働者が眠る墓地。石ころと統一旗が目印。

労働者たちが住んでいたバラック小屋跡と、アリラン峠の一つを案内してくれた。あいにくの雨の中、竹やぶをかき分けてぬかるんだ道を進むのには苦労したが、朝鮮人労働者たちの望郷の思いを想像することができた。

日向墓地に眠る朝鮮人は、墓碑がわずかに散在するだけで名前や

戸籍はほとんど分かっていない。朝鮮半島から訪れた募参団が残っていた統一旗だけが、その歴史を何とか伝えようとしていると感じた。

墓地を案内してくれたイベント会社「共同ポケット」代表の山本剛司さん（38歳）の祖父は炭鉱で働いていた。朝鮮人労働者の話を

日向墓地

聞かされて育った山本さんは、炭鉱遺跡を巡るツアーを企画し、朝鮮半島から訪れる募参団の受け入れにも尽力している。朝鮮人労働者の歴史を刻む石碑を建てる計画もあるが、強制労働などの「負の歴史」が表に出ることを嫌う政治家の反対や日韓関係の悪化で暗礁に乗り上げているという。

歴史には輝かしい発展もあれば、悲しい過去もあるはずだ。歴史を偽って過去の栄光だけを語り継ぐのではなく、現実を直視することこそが、未来のために必要な姿勢ではないだろうか。時代に翻弄された朝鮮人労働者に、今も安らかな眠りは訪れていない。

高橋広之・日本大学

韓国人徴用犠牲者慰霊碑

「炭坑節」に歌われた福岡県田川市の三井田川鉱業所跡地の高台に、「韓国人徴用犠牲者慰霊碑」はひっそりと建っていた。

「涙が出そうになるから、話せない」。ハンゲルで書かれた碑文を食い入るように見つめていた韓国カトリック大学の李俊燮さん（24歳）に感想を尋ねると、こんな言葉が返ってきた。周囲で談笑しながら写真を撮っている日本人学生とは対照的な様子だ。

「日本語では言い表せないけれど、悲しいは通り越しているよね」。通訳として同行した在日本コリアン2世で、北九州市に暮らす金文玉さん（64歳）が、心情を代弁した。「本当は碑を見たくもないし、思い出したくもない。痛いところを何度もえぐられて、かさぶ

埋もれる過去を伝え継ぐには

たをはがされているような感じだから」。それでも碑があることで、歴史が記憶され続けていくことには大きな意味があるのだろう。

日本の労働力不足を補うために戦前から強制徴用が始まり、戦時中には福岡県だけで17万人余りの朝鮮人が働いていた。小学校高学年の少年も含まれ、炭坑の過酷な労働で命を落とす者も多かった。慰霊碑は在日本大韓国民団が中心となり、1988年4月に建立された。犠牲者の名前は刻まれておらず、名前どころか亡くなった人数もはっきりとは分らない。

碑文には「この先いかに歳月を重ねようとも、この凄惨な事実が埋もれてしまうことがあってはならない」と刻まれていた。過去にこの地で何があったのか、どんな人が働き、故郷に帰れずに亡くな

ったのか。鉱業所跡地にオープンした「田川市石炭・歴史博物館」のパンフレットには何も書かれていない。

フォーラムに参加した韓国人学生の中で、今春から聖公会大学校大学院で日韓関係を学ぶ予定の朴承鎬さん（25歳）は、将来の日韓関係について「過去に起きたことを共有できなければ、表面的に仲良くしたとしても、関係はすぐに崩れてしまうのではないか」と話す。若い世代で朝鮮人の徴用などの歴史に関心を持つ人が少ない

ことに、危惧を感じるという。私は福岡で生まれ育って福岡の

大学に通い、石炭・歴史博物館も訪れたことはあるが、この慰霊碑の存在すら知らなかった。日本の近代化を下支えした炭坑が多く、朝鮮人労働者の犠牲の上に成り立ってきたことに、まったく目を向けていなかった自分を恥ずかしく思う。二度と悲劇を繰り返さないために、埋もれた事実を掘り起こし、記録し続けることは若い世代の責務だ。その積み重ねがあつて初めて、良好な日韓関係が築けるのではないか。

西尾真奈・九州大学



三井田川鉱業所跡地に建つ「韓国人徴用犠牲者慰霊碑」。

「チ」ッソだけが悪いわけでは
ない」

胎児性水俣病患者の口から、加害企業のチッソ（旧新日本窒素肥料、現在のJNC）をかばうような言葉が出たことに驚いた。チッソは今も熊本県水俣市の中心部に存在感を示し、市民の生活とも密接な関係がある。水俣病の被害拡大の背景には、企業城下町として栄えた地域の事情と、経済優先だった高度経済成長期のひずみがかび上がる。

水俣病が公式に確認されたのは1956年。その3年後には、工

「書」いて守れ。書かないで守れる人権はない」

地元の熊本日日新聞（熊日）の社会部記者として、水俣病などの取材に取り組んできた高峰武さん（67歳）の言葉だ。水俣病資料館で2月1日に開かれた講演で、水俣病と報道を巡る話を聞いた。

初めて水俣病に関する情報が『熊日』に登場したのは1954年8月1日。「猫てんかんで全滅」という見出しの小さな社会面記事だった。ネズミが増えたことへの陳情を取り上げた記事だが、「百余匹いた猫がほとんど全滅」各方面から猫を貰ってきたが、これまた気が狂ったようにキリキリ舞して

場廃水に含まれていたメチル水銀が魚介類を介し、人間の体内に蓄積されたことが原因だと判明した。しかし、国も熊本県もすぐに廃水を止めることはなかった。経済的な依存があり、市民の「チッソを守りたい」という思いも、適切な対策を阻んだ。

胎児性患者の永本賢二さん（60歳）は、チッソで働いていた父を持つ。子どもたちにとっても、チッソは憧れの存在だったという。永本さんの小学校の校歌には「華咲く煙」明け暮れ渡るベルトの響き」などと、誇らしげに表現した

熊日で水俣病取材に 取り組む

高峰武氏講演

死んでしまう」などと、奇妙な様子を明確に記述している。「説明がつかない出来事を見逃さず、ありのままの様子を伝えた意味は大きい」と、高峰さんは強調する。

水俣病の原因究明の動きを追う報道は続く。やがて有機水銀が原因だとする説が有力視されるようになり、廃水を出していた原因企業の「チッソ」に目が向けられるが、『熊日』は「水俣工場 廃水停止は困る 市民の生活に響く」と報じた。漁民らは廃水停止を求めていたが、大多数の地元住民にとって、チッソはなくてはならない存在だった。住民の健康と経済的な利益のどちらを優先するのか。

水俣病 患者と交流、傍観者ではいられない

歌詞があるほどだ。

「国には廃水を止めなかった責任がある」。現在は車いすで生活している患者の松永幸一郎さん（56歳）は強調した。原因判明時に廃水を止めていれば、1963年生まれの松永さんが水俣病に侵されることはなかったはずだ。

永本さんと松永さんは「水俣病から宝物を伝えるプログラム」のメンバーとして、歴史や教訓を語り継いでいる。

「水俣病を引き起こした社会の延長線上で生きているという意味で、私たちも当事者です」。今回の宿

今では答えは明らかだが、経済最先の時代には難しい判断だったのかもしれない。高峰さんが「水俣病の問題は多面体」と語る理由の一つだ。

チッソの正門近くには昨年3月、「メチル水銀中毒症」への病名変更を求める看板が設置された。水俣病という名称が地域のイメージダウンに繋がるとして、医学的



学生らの前で話をしてくれた水俣病患者の永本賢二さん(左)と松永幸一郎さん。

泊先だった「水俣病センター相思社」の永野三智さん（36歳）の言葉だ。教科書に載っている歴史としての「水俣病」しか知らなかったが、水俣の人々と交流するうちに傍観者ではいられなくなった。今こそ水俣病の教訓を学び、その過ちを二度と繰り返してはならないと実感している。安西季姫・上智大学

な原因物質を指す名称に変えようとの意見も根強い。公園として整備された埋め立て地の海岸の下には、水銀に汚染された土壌が今も残る。水俣病はまだ終わっていないと感じた。

生後まもなく水俣に移り住んだ作家の石牟礼道子さんも、著作『苦海浄土』などで水俣病患者の声を伝えた一人だ。今回のフォーラムでは、石牟礼さんの生前の資料が残された熊本市内の真宗寺を訪れた。資料の展示を目指して今も整理が続いているという。水俣病の教訓を後世に伝えようとする一つの形だろう。

相澤一郎・東洋大学

四 大公害病としての「水俣病」

という言葉は知っていても、地元住民の感情や企業との複雑な関係などはあまり知られていない。その実態にさまざまな角度から追ろうと、水俣病のドキュメンタリー番組を計13本も制作した人がいる。熊本放送のディレクターだった地元出身の村上雅通さん（66歳）だ。「市民たちの水俣病」記者たちの水俣病「水俣病 空白の病像」……。番組のタイトルからも、水俣病のさまざまな側面が垣間見える。

「人生の空白を埋める13本なんですよ」。村上さんは自嘲気味に答えた。一連の番組をつくり始めたのは、政府が未認定患者の救済策を決めた1995年。父親が加害企業チッソの下請けで働き、当初は患者への偏見や後ろめたさを拭い切れなかった村上さんは、78年に入社して以降、水俣病関連の取材を避けてきた。

人生の空白を埋める 水俣病のドキュメンタリー 村上雅通さん



チッソの正門前で説明する村上雅通さん(中央)。

「彼女の苦悩に比べたら、自分の苦労などたいしたことではない。これまで何をやってきたのかと、人間として恥ずかしくなかった」。その思いが番組制作にのめり込む原動力となった。

自らの偏見や後ろめたさと真剣に向き合い、人生の「空白」を埋めてきた村上さんの姿勢には学ぶことが多い。今回のフォーラムで、日韓関係や政治事情を韓国人学生と語り合い、同世代で未来を模索できた経験は大きな財産となった。日本人の嫌韓感情は近年強まっているが、忘れてならないのは日本が統治時代に加害者側だったという事実だ。日本は韓国とどこまで真剣に向き合い、過去の「空白」を埋める努力をしてきただろうか。国の立場にこだわらず、一人ひとりが人としてしっかり振り返ることが必要だと思う。

中野一希・早稲田大学

九州に向かう足取りは重かった。「徴用工問題について考える」という日韓学生フォーラムのテーマもそうだが、陸軍入隊を1週間後に控えた私の心は軽くなかった。だが、徴用工問題は韓国と日本がともに考えるべき歴史問題だから、記者になりたい私にとって現場調査は欠かせなかった。日本人の記者や学生らが植民地支配の加害の歴史についてどう思っているのかも気になった。

初日は自己紹介と交流会。2日目から本格的な日程が始まった。炭鉱の下に朝鮮半島

出身の徴用工らがいたとすれば、炭鉱の上には労働者を酷使する特権階級の人々がいた。麻生太郎副総理の曾祖父である麻生太吉は、朝鮮人の強制労働を利用した炭鉱経営で大金を儲けた。九州地域における麻生家の影響力は今も大きい。さびれた炭鉱跡とは



韓国人徴用工犠牲者慰霊碑をつめる筆者。(撮影/猪股修平)

日本人学生らの学ぶ姿に 小さな希望を見る

対照的な麻生氏の広大な邸宅。植民地支配の遺産といえるだろう。その後、かつてアリアン峠と呼ばれた峠道に向かう。徴用工たちがつれてこられた現場だという表示板すらない、寂しい丘だった。忘れられていた歴史を掘り起こした林えいだい、上野英信らのジャーナリストたちを思い、記者の役割について考えた。この場所を熱心に取材する日本の記者や友人たちを見て、強制徴用の歴史は韓国と日本がともに調査すべきことで、そうした取材に全力を尽くすべきだ

と考えた。次に行ったのは田川市だ。今では小さな都市だが、炭鉱のあつた町で多くの在日朝鮮人が暮らしていた。三井田川鉱業所跡地の高台に慰霊碑があった。ハンゲルと漢字の混じった慰霊碑を在日朝鮮人、韓国の学生らとともに読みながら涙をこらえた。歴史の中に置き忘れられた犠牲者らの声は、今も日本社会に反省と解決を求めている。

最後の目的地は朝鮮人無縁墓地だった。日本人や犬の墓の後ろに小さな石が置かれただけの墓。その石と、墓参団がおいていった旗だけが、朝鮮人の遺骨が眠る場所であることを示している。犬の墓にも劣る扱いにとまどった。目をしっかりとつむり黙祷した。昔の朝鮮人は生まれた場所に亡骸を埋めたがった。親族の墓が1カ所に集まっているのはそのためだ。名前を失い、死んで故郷に帰ることすらできなかった人々を思った。日本人学生らが真摯に学ぶ姿と追悼する姿に小さな希望を見た。

権大鉦・韓国カトリック大学校 (原文は韓国語 翻訳/文聖姫・編集部)